



学生時代の旅

池 道 彦*

Journeys in Student Years

Key Words : Journey, Student years, Past and present

1. はじめに

“随筆”というのは“見聞したことや心に浮かんだことなどを、気ままに自由な形式で書いた文章(大辞林)”らしい。本稿の掲載は夏号ながら、締め切りは4月中旬ということなので、新年度も始まったばかりの今執筆しなければと動き出したところである。しかし、今心に浮かぶのは昨日まで行っていた沖縄・石垣島への家族旅行のことである。本誌に相応しいのかどうかはわからないが、まずは“気ままに”この旅行の話から書き出すことにしたい。書き進んでいくうちに適当に流れができて、テーマも後付で決まるのだと思う(最終的にはタイトルは標記の通りにさせていただいた)。

妻と小学5年生を終えた長男、2年生を終えた長女の4人で3月末に出た石垣島への旅は、4泊5日になったが、これは満席ばかりの大阪-石垣のフライトのうち、どうにか予約が取れた便の都合であった。こちらでみていた天気予報に反して旅行期間中は連日晴れ、気温は最低でも20度、最高は30度近くになり、本土より一足早い夏を迎えていた。どこから見ても海はリーフを映すエメラルドグリーンと外海のディープブルーのツートンカラーで美しく、野は青々としたサトウキビ畑にハイビスカスなど色

とりどりの花で満ち、山は本土では見ないヤシや大きなシダがところどころに目立つ、圧倒的に豊かな自然に包まれた島で、本当に安らぐ時間が過ごせた。

子供達は景色を眺めることで多くの草木や花の名をおぼえ、警戒心の低い原色の蝶を追うことでやがてその名もおぼえた。3月下旬に海開きがあった割には、まだ泳ぐ人は少なかったが、気温が上がり風が止んだとみればビーチに走り、可愛い熱帯魚がたくさんいる海にもぐってシュノーケリングを満喫した。4本足の変異体のヒトデをみつけて棘皮動物は本来5角形の生物であることを教えた(写真)。イソギンチャクに棲むクマノミや、大魚の体をつつくホンソメワケベラを見て、共生とは何かを少しは理解したようだった。島自体がサンゴの化石でできていることも何となく分かったらしい。夜には「大阪の10倍(の数)はある(長男)」という星を眺めて、星座を幾つか探し当てた。西表島へ足を伸ばした日には、ジャングルの入り口で天然記念物のセマルハコガメを見つけ、甲羅の腹側がちょうつがいのように折れ曲がる、珍しい動物の体の作りを知った。さすがにイリオモテヤマネコには会えなかったが、絶滅の可能性のあるこの希少種が偉大な自然に依存して暮ら



石垣島・川平で見つけた4本足のヒトデ：こんな奇形はどの程度の確率で起こるものなのか、知っておられたら御教示願いたい。私は初めてだった。



* Michihiko IKE
1963年2月生
昭和62年大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻・博士前期課程修了
現在、大阪大学大阪大学・工学研究科環境・エネルギー工学専攻、教授、博士(工学)、環境工学(生物を利用した環境保全・浄化)
TEL 06-6879-7672
FAX 06-6879-7675
E-mail : ike@see.eng.osaka-u.ac.jp

していることは実感したに違いない。ゆしどうふ、ゴーヤチャンプルやなど島料理も派手ではないが美味しく、パイナップル、パッションフルーツなどの果実も豊富で連日堪能したが、それが土地の海や山の幸であることを感じ取ったことだろう。空港に着いた直後、宿に向かう車内から、前に石垣が積まれた低い屋根の民家や魔よけのシーサなどをみた長男は、「教科書通りや」と感心したようにいっていたが、最後には教科書やガイドブックでは分からない沖縄、あるいは石垣島等の離島の自然や文化を本当の意味で学べたのではないかと思う。

こう書いてくると、この家族旅行は子供達を豊かに教育することが目的であったかのように聞こえるが、実はそれをダシにして、大学生・院生の時代に訪れた島をもう一度楽しんでみたかったというのが本当のところだ。

私が阪大生であったのは20年も前のことになってしまったが、いつも3月の学年末休みには石垣島、西表島など沖縄の離島に1月弱の長い旅に出かけていた。宿代はかけずテントに泊まり、島料理も食べず自炊する貧乏旅行だった。『生物研究会(生研)』というサークルに入っており、春合宿と称して、南の地に特有の植物や動物、昆虫などを観察しにいったのだ。といえは立派かもしれないが、実のところは、とにかく仲間と海で泳ぎ、森を探検し、夜空を眺めて流れ星を探す、さらにはキャンプしている浜で地元の海人がくれた魚を“あて”に、泡盛で乾杯することを楽しむためだった。一方、夏休みには夏合宿と称して北海道に行き、『北海道ワイド周遊券(大阪から北海道までの往復、道内に入ってから出るまで20日間の全ての国鉄線、国鉄バスの特急までが乗り放題の旧国鉄の割安チケットだが、JRになって消えてしまった)』が使える20日間、やはり北に特有の植物や動物、昆虫などを観察に…これ以降は繰り返さなくてもお分りのことである。

旅を通じて子供達は多くのことを学んだだろうと書いたが、学生時代の長い長い石垣島・西表島の旅では、今回のような親から子への“レクチャーもどき”とは全く違うスタイルで様々なことを学んだ。あるいは学んだというようなことではないかもしれないが、今の自分にとってかけがえのない多くのものを得た旅だったと思う。

その当時の沖縄離島行きは、まる3日間かかる船

の旅で始まり、また3日間の移動で終わった。旅の出発日、帰着日は船が出る曜日で決まっていた。例年2月になると『沖縄離島情報』という小雑誌を買い、どの船に乗るか、離島間はどう移動するか、とにかくコストが安くなる移動の工程を、あれやこれやと考える。遅れてくる仲間とはどこで合流するか、何人用のテントがいるかなど、毎日のように暗い部室で夜遅くまで相談していた。こじつけかもしれないが、ある種の情報整理の能力と計画性が身についたようには思う。いざ旅が始まると、まずは大阪か神戸から那覇へ向かう船の中に2晩幽閉される。じたばたしても仕方ないので、目的もなく海を見ているか、くだらない話をしているが、気がつけば仲間が何を考えているかを真剣に話していることもあった。最近では少なくなった“若者が熱き思いを語り、聞く場”がそこにあった。普段のイメージとは違う彼、彼女の内面を感じ、自分自身が何かを考えさせられたりもし、自分を見つめる機会にもなった。島では2時間に1本程度のバスの都合に合わせて移動するので、とにかくペースはゆっくり。雨が降って望んだ風景に出会えなかったり、目的を達せなかったりすると滞在を延期し、「また明日考えよう」、である。どこかのキャンプ場にしばらく腰をすえては周りを徘徊したり、アザラシのように浜に漫然と寝転んだり、お陰で普通なら滅多に見られないような生き物や出来事にもしばしば出会えたような気がする。水中でしばらくウミヘビとにらめっこをしていたり(どちらもすくんで動けない?)、真昼間にでかいコウモリが飛んできて驚いたり、夜の海でリーフに砕ける波が夜光虫で光る幻想的な風景も見た。新月の夜は本当に暗く流れ星を幾つも見つけたが、満月の夜は浜辺で影ふみができるほど明るかった。そして、ゆったりしたガイドのつかない旅の中で、豊かな自然を感じられる素直さを学んだように思う。面白いもの、謎のものを見つけては、正体を調べ、解き明かそうという好奇心が育った。これは、今回の家族旅行でのように小さい子が親等から教わる知識とは全く違う“学習”であった。インターネットのない時代、苦心して集めた図鑑や本で予備学習はしていくのだが、旅に行くたびに新しい発見があり、知識を塗り替えることのできる驚きと喜びを感じる体質が身についた。

この春の家族旅行の5日間で子供達が沖縄の離島

で見聞きし、体験したものごとは、項目だけを並べてみるならば、私が学生時代の6年間で合計100日近くをかけて見聞きし、体験したものごとの何割かにも及ぶと思う。今回の滞在期間中レンタカーを借りっぱなしでバスの時間など気にせず、行きたい海や森にとんでいけた。大潮で水が干上がり近場で潜れなかった日のシュノーケリングは、ホテルのガイドについてもらい、リーフの外までボートを出してもらった。悪い言い方をすれば“金に糸目をつけず”効率的で快適な道具立てを駆使した旅であり、ある意味で成果は大きかったが、しかし、私の学生時代の非効率的な旅に必ずしも優ってはいないともいいきれぬ。子供達も大学生くらいになって再び石垣島・西表島に行きたいと思うことがあれば、不便利でお膳立てのない旅を試みて欲しいと思う。

実は数年前からOBということで『生研』の顧問になっている。年に一度、サークルの継続願に印をつくときに、部長さんか代理の学生さんがきてくれて、毎年の活動報告などしてくれるのだが、春合宿での石垣・西表行は途絶えて久しくなっているようだ。最近は近場のバードウォッチングや野山の散策、キャンパス内での生態調査などが中心で、少し長いかなと思う旅は奄美大島10日間程度が限度のようである。夏の北海道合宿もしていないようで、少し寂しい。しかし、奄美に行ったある現役部員の紀行文には、旅先での出来事が生き生きと描かれていて、我々の思い出を髣髴とさせ、何となく嬉しい。冒頭では、「船旅のつらさを改めて知りました。そして、ドコモの電波の弱さを思い知りました。」と、携帯電話が使えないと不安だという、私の理解しにくい現代っ子の特徴を見せてはいるが、多感で時間をゆっくり使える学生時代にする旅は貴重なものと再び確信させてくれる。自分の子供達や『生研』の後輩達ばかりでなく、多くの阪大生、さらには日本の学生さん達に、もっともっと非効率的で“足の向くまま”、“気の向くまま”の自由な旅をすることを望みたい。

ただ、最近の大学生の春・夏の休みは、昔に比べると短く、“自由”に使いにくくなってきており、それ故に非効率的で長い旅が流行らなくなってきたように思える。別な言葉でいえば“制約”が多くなっているということであろうか。昨年度、新入生(学部1年生)の担任を仰せつかったのだが、夏休みは7月11日から9月10日まできっちり2ヶ月間あつ

た昔に対して10日間程度短くなっている。また、休み中クラス別懇談会(科目履修の手続き等をしたり、その確認をしたりする小学生なら登校日みたいなもの)なるものが2回あり、連続した長い旅行には向かなくなっている。昨年の場合8月8日まで授業があり、その後9月いっぱい夏休み。夏のクラス別懇談会と履修登録期間は8月24～26日の間で設定され、そこに出てこない2学期の履修登録ができない。9月30日には再びクラス別懇談会があつて、ここでコンピュータ登録された履修科目の間違ひがないかをチェックさせる。小学生の頃から慣れてきた暑い暑い7・8月ではなく、9月が夏休みのメインであるというのも違和感がある。3月も大学科制の入試の産物として、学科目やコースへの分属の手続きがあり、昔ほどほったらかしではないので、やはり2年への春休みも実質的にかなり短い。2年生以上は春・夏休み中のクラス別懇談会はなく、春・夏ともに1ヶ月半以上の連続した休みにはなるのだが、多様な教育プログラムの導入がさかんで、集中講義やセミナー、大学が推薦するインターンシップや語学等の研修ツアーなどもあり、勉学意欲のある学生ほど自由に使える夏休み・春休みが短く、長い旅には使いにくくなってしまっているように思う。

今の学生達に、とにかく長く、自由な春・夏休みをあげたら、どんな旅をするのだろうか、興味がある。交通や情報収集など昔よりは便利になる一方、キャンプ禁止地域が増えたり、ローカル線等の経済性のない交通が廃止されたりと、気ままな旅をするにはいろいろな制約が増えてきているが、やはり我々のときのように、どこかへ不便で非効率的な自由な旅を目指すのではないかと思うのは単なるノスタルジアなのだろうか。

このいいかげんな随筆が印刷される頃には、もうすぐ大学も夏休みである。うちの小学生らは既に夏休みに入っていることになる。仲のいい友達の一人が北海道出身でたびたび帰省することもあるが、長男が「次は北海道に行ってみたいな」といっている。私自身も春休みの石垣島旅行に味をしめており、夏休みにも自分の思い出をたどることをメインテーマに、少し長い北海道の旅に連れて行ってやりたい気もする。しかし、彼の夏休みは7～8月、私は大学院入試が8月にあるので、体が空くのはやっと9月である。ちょっと無理かなあ。